

【随 筆】

秋は赤い実でしょう

住 吉 尚

(釧路支部)

紅葉と共に赤い実が目立つ季節です。道東で車を走らせていて最も目につくのは、たぶんマユミの実でしょう。マユミは真っ赤に紅葉するとばかり思っていましたから、少し黄色くなっただけで落葉していくこの木は、マユミではないと思っていましたが、違ったようです。実が遠くからでも目立つように、実が赤くなると早々に落葉していくようで、葉が紅葉する木はほんのわずかです。枝いっぱい真赤な実を付けたマユミはそれはそれは綺麗なものです。しかも木によって色が微妙に違い、ピンクのものから真赤なものまであるのも面白いと思いました。マユミの実にはカラスが集団で飛来して食べているのが良く見られます。そのため、この木は電線沿いや線路沿いに多く見られますね。



マユミの実

先日道路脇にカラフトイバラの赤い実を見ました。バラの実をローズヒップと言いますが、私が知っているローズヒップで一番大きいのはやはりハマナスの実でしょう。ハマナスは今でこそ北海道を代表する花ですが、私が持っている昭和15年発行の牧野植物図鑑によると、関東以北に分布し、種の名前にはハマナシと書いてあり、間違った呼称としてハマナスと書いてあります。これは昔、関東以北の人が「し」の字を「す」と発音したことに起因します。それで、ハマナスは浜の茄子ではなく浜の梨のことだったのです。この図鑑には子供がこの実を

食べると書いてありますから、昔食べ物が少なかったので腹がすいた子供たちがこの実を食べていたのでしょう。実が赤いので見た目は梨には似ていませんが、食べると梨の味がするのでしょうか？この文を書きながら私も一度は食べてみようかな、と思いました。私たちが子供の頃はこの実を割って中の種子を誰かの背中に入れるという悪ふざけを良くしたものでした。種子の周りに毛が生えているせいか背中が大変かゆくなりましたが、特にかぶれることもなく、みんなでワイワイガヤガヤと互いの背中に入れては、入れられた人は服を脱ぎハマナスの種子を叩き落として、また誰かの背中に入れるという単純な遊びでした。何もない時代の子供はたくましかったのですね。ところで図鑑ではハマナスは関東以北に分布すると書いてあると言いましたが、実は昭和初期には、当時のハマナス分布の南限が茨城県にあって、天然記念物に指定したそうです。でもそこにハマナスがあると宣伝したようなもので、当時の天然記念物の指定には、保護が付いていなかったからでしょうが、たちまちその場所のハマナスは絶滅したのだと父から聞きました。

「ハマナシ」を現在では普通に「ハマナス」と書くようになりましたが、同じように間違いがそのまま普通に使われるようになった例は他にもあり、現在では普通に「スケソウダラ」と言いますが、本来の意味からすると「スケトウダラ」と言うのだそうです。昭和の時代には新聞も「スケトウダラ」と書いていたのを覚えている人も多いのでは。

秋が深まると共に赤い実が目立ちますよね。小さいものではスズランの実も真赤ですが、薔薇の中でしかも背が低いので、こちらは目立ちません。ハマナスの実の味を知らなかったので「この機会に！」と食べて見ました。今我々が食べている果物はとても甘みが強いものが多いので、今の人たちには物足りないでしょうが、甘みがあり、酸っぱみもあり、充分食べられるものでした。多分私が子供時代を暮らした場所がハマナスの自生地から遠かったので、食べる機会がなかったのでしょう。ハマナスの自生地が近い場所に住んでいた方は、この実を採ってジャムを作ったりしていたのでしょうかね。ハマナスによく似た花が咲くのでヤマハマナスとも呼ばれるカラフトイバラは、この時期にはハマナスとはずいぶん違った風貌に変わっています。ハマナスはポツポツと秋になっても花が咲きますから、実も良く熟れたものから青いものまで様々で、良く熟れたものは食べられてしまうのか順次なくなりますから、実は「枝いっぱい」とはなりません。ところがカラフトイバラは今時期には枝いっぱい

いに赤い実を付けています。プックリと胴が膨らんだハマナスに比べるとカラフトイバラの実は細長く、少し小さい実です。これも食べてみました。こちらは何の甘みも酸っぱみありませんでした。ただ、たくさんの実の中の1個だけの味見ですから、これで全体を評価するのは少し危ういと言う気もしました。と言うのは、登別にいた頃、秋になってコクワの実がなると食べようと楽しみにしていましたが、何時もカラスに先を越されてなかなか美味しい実にありつけませんでした。ところが、森の中に1本だけたわわに実がなっているコクワを見つけたので、喜んで実を採って食べてみたところ、なんとこの木の実は全く甘みがありませんでした。カラスはそんなことも先刻承知していたのですね。

ところで、コクワはサルナシとも呼ばれます。猿が食べる梨の意味でしょう。どうやら昔の人は果物の意味で梨と言っていたようで、梨の味がするという意味ではないようです。さてこれらの実を主に食べているのは誰なのでしょう？私は1月にタンチョウのカウント調査で農道を走っていた時、キレンジャクが道路脇のヤブの中

で盛んに何かを食べているのを見えています。今考えるとカラフトイバラの実を食べていたのでしょうか。こんな実が冬に飛来するキレンジャクやツグミの良い餌になっているようです。でもハマナスの実を食べているのは誰なのでしょう？やはりカラスでしょうか？カラスは色々な山の実を食べ、まき散らす重要な役をやっています。動物園ができた時には園内にフキもウドもありませんでした。フキはタンポポのような綿毛を持った種子が遠くまで飛ぶので、新しい裸地に最初に入ってくる植物です。でもウドは黒い実を付け、誰かに食べられ種子をまき散らしてもらうしかありません。これを担うのがカラスです。なにもなかった園内で最初にウドが生えていたのは外周柵の縁でした。ウドはカラスが良く止まる場所に生えてくるのです。ウドをはじめとするウコギ科の植物は黒い実を付けるものが多いですね。タラ、ウコギ、セン、などがあります。一方の赤い実はバラ科の植物ならたくさんありますね。アズキナシ、ご存知のナナカマド、エゾノコリンゴ、ヒメリンゴ、等々。と思いながら走っていると、巨大なそして見事なまでの真赤な実、ワオー！



カラフトイバラの実



エゾウコギの実



ハマナスの実



ホウの実

私が見た最大の赤い実はハウの木の実です。20 cmはあるでしょうか？もちろんですが、種子はの中からたくさん出てきます。丁度松ボックリから松の種子が出て来るように、たくさんです。ハウは枝の先端の大きな葉に隠れてはいますが、これまた葉に負けない大きな花が咲きます。これは葉が変化して花びらになったという進化の歴史を示しているのです、花が咲く植物としては最も古いタイプの植物だと思われています。ホオに近いコブシも赤い実を付けます。

10月10日の日曜日は夕方から天候が崩れるとの予報。午前中ならと出かけてみました。シラルトロ湖には十数羽のハクチョウと数百羽のガン、マガンでしょうか？ヒシクイでしょうか？道路はカーブしていて、車列を作っただけで通り過ぎました。あちこちでデントコーンの刈り取り作業が行われており、刈り取った跡にタンチョウが多数飛来しているのが見えました。鶴居を回って仁々志別に入り、山花を通して帰って来ましたが、途中で麻が目立つところがあり、つまんでみると麻の実がコロコロと出てきました。こちらは赤くもなく、真っ黒くもありません。でもこちらは皆さんも七味唐辛子にも入っていて普通に食用とされていますから、いつも見えていますよね。私が子供の頃は小鳥の餌としても普通に売られていて、庭で良く発芽したものでした。でも現在売られている食用の麻の実が発芽しないようにされているはずです。これは麻薬取締法で麻そのものの栽培が禁止されているからです。でも戦前は麻を栽培して繊維を採るということが普通に行われていましたから、現在でも雑草としてしぶとく野生下で生き残っているのです。麻の他に亜麻と言う植物もあり、こちらもその昔は繊維を採るために栽培されていたので、私が子供の頃、遠足で行った上尾幌の草原に亜麻の薄い青色の花を見たことがあります。でもこちらは野生化することなく、消えていったようですが、麻の方はずいぶんしぶといものですね。私は「麻」と書きましたが、大麻取締法と言いますから、法律上は「大麻」が正しいのでしょうか。「大麻」は健康被害が少ないという誤った認識をしている人がいるとのニュースも流れますが、現在ネットなどで取引されている「大麻」は私が見た野生大麻とは全くの別物です。植物としてはどちらも同じ種ですが、遥か数千年前から繊維を採るために改良されてきた「麻」と、興奮作用がある薬草として改良されてきた「大麻」があります。現在では「大麻」の原産地に近いからでしょうか、イスラエルで薬物としての改良が進んでいて、麻薬としての成分は格段に

上がっていると言いますから、現在の「大麻」は恐ろしい麻薬になってしまっています。ケシから麻薬を採りますが、こちらもその実は食用にしますよね。ケシから採れるアヘンを精製したものがモルヒネで、モルヒネには大変強い鎮痛効果がありますが、習慣性が強く出てしまいます。それで、強い鎮痛効果がありながら習慣性が出ない薬物を作ろうと、「大麻」を改良していると聞きましたが、上手くは行っていないようです。秋に種子ができてしまってからでは野生大麻の駆除もできませんね。



大麻

麻薬取締法は徐々に規制薬物を増やしてきていますね。これは新しい薬物ができるからでしょうが、以前は規制していなかった薬物も、使い方によっては危険があるということで規制したのかも。私が動物園にいた頃に、肉食獣の麻酔薬として使っていた薬物も、現在では麻薬取扱者でなければ使用できません。動物園ではいろいろな動物を飼っていますから、全身麻酔をかけるにも動物の種類によって異なる薬物を使用します。クマならこれ！シカならこれ！シマウマならこれ！と、違う薬物を使用しなければなりません。これが難しいのです。全身麻酔をかけるには、大型肉食獣は比較的簡単で、事故も少ないですね。でも草食獣は難しく、種によってあるいは性別によって効き方が違ってきます。シカの角を切ろうと麻酔をかけます。次々倒れるのですが一群のボスは「雌たちが見ている前で倒れるわけにはいかない」と思うのでしょうか。普通の1.5倍の量でも倒れまいと懸命に頑張ってしまう。男の意地だー！